

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 JAPAN 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

へ 13
3295
4

平將門退治圖會三

起天慶二年十二月
至同三年二月

天正十九年九月九日
本大學出版部贈

第九 將門秀郷對面
附 貞盛東國下向

去りて不將門の箕田の城を圍み攻めて、將門を討漏その後も既に
敵源一途とせん。その謀叛所ありて大あがびてまぐこの城を入る諸卒
の軍馬を弓ひけつて當圓濱圓の諸士とて死見圓。渠元來食れ。其の軍
馬とて人ども。既小車八箇四て切腹り。その威勢は大きく。小林經基王舞
乃疏減して守り。かゝり。衆寡敵せを感傷つて。忽地没落ゆめ。されば
敵ふ。とて拒き敵さんとせ。集づてふ死さんと。流かみそとふか。とま
渠ふ返ひ居。時の便宜を窺ひ。然りくと馳来りて食その旗不屬せと

隠む。とふ於て將門さちどが勇威おうゐ。ひさす
都とへ貢せあ養のうらんと織おりつる。是そこで熟じゅくかりゆす。今年數箇度すうかどの頃ごろ。將軍おも
疲勞ひらうせう。殊ことふこのわなど寒さむ風かぜ烈れつ。築つき成な進すすむ方ほうへも。よく膳ぜんト食くせう。春はる風かぜ暖ぬくの時ときと候まつ。東國とうくに一圓いつげん
お貴食きしょくり。と一舉ひときめく望のぞみを達たどり。と恩おんのうの諸よろ諸軍しょぐんを優すぐり。且また下総しもふさへ
凱陣がいじんす。曾もて今年戰功せんこうの深廣ふかひろす。然しかるの由ゆは彼かれを授はけ。是そこで信足しんぞくを極きわめ。是そこで
野の大掾だいぎん河内守かわちのかみ村雄むらおの嫡男おやぢ。う馬うまの名譽めいよ甚ひそく高たかく。殊ことふ一族しやく族ぞく。と東國とうくに
弟おもののきしき。此こ程てい將門さちどが勇威おうゐと聞き傳つた。渠わ王おう孫そらとのぐど。數年すうねんうち偏ひだり
毛けを在いたけず處ところ常じつ陰かげの大掾だいぎん河内守かわちのかみ行ゆて。その威勢ゐせい並なまぐののを。既すでふ東國とうくに
切き驚おどろけ人の後あとひ屬すくねる。木きの下した生なすふ貌めうぐど。大方渠おほら有あと。とあるて官方かんぽう

主おてへ我藏わがくらす。箕田みたの一城いちじゆの主おし。是そこを没落ぼれり。經基けいきを塗つぶす是そこと。假あ高たか換かわの相あすや。館いわへりゆり。健けん人じんと思おもひ。の者もの來きみ出だせ。下總しもふさ一縣いっけん。
門前もんぜんふ控ひかへ。乘のり。使つかはすく。女めのと。もの音信おとこゑと通とおし。ト。將門さちどは。不ふ大だい小こ。
次つづび渠わの間まを各かく登のる。今宵よ下風ふかぜふ。主おんとり。こ。教お日ひの本ほん意い。達たつす。
以よて。急いそき秀ひで郷ごうを客き役えき。小こ清きよト。ぬ。あ。時とき將門さちどい。奴めの女めのを。多おく。變かて。抗たたかり。
是そこ在いたけず。餘ありの半はん分ぶん。持もつ。大お豪ごう。鳥とり帽ぼう子こ。引ひ入いり。と。罕ま。對たい面めん。秀ひで郷ごう
慎つつて。言ことを。す。遠とお回まわ。大お義ぎと。思おも。て。既すで小こ近ちか回まわ。と。往むか。某もし不ふ肖むかの。身みと
つづる。も。舉あ下さ。小こ列れつ。忠ちゆう節せつを。抽ひだ。く。存こする。は。有あ。是そこを。推しの恭うやまり。と。之のを
持もつ。門もんを。而よりて。笑わら。て。後あと。貴きき。芳よし名めい。の。是そこを。も。使つかは。と。主おを。挾なまま。秀ひで郷ごう
ままさん。と。存こする。處ところ。過すぎり。の。来き。陷おち。實じつ。小こ喜き悦えつ。ふ。堪たまさ。か。吾われ。本ほん懷なま。と。達たつす。
ままい。毛けを。狂き。と。折たた。領りょうを。授はけ。官かん位い昇の進すす。も。主おと。け。と。實じつ力りきを。捕つかけ。の。つづ。

節度使の下向を俟け里
え

金鷲きんじゆの城じゆを構くへての間ま接せつ裏うりの腹はらに惟幹いしづか兵ひょう備び前まへ千高ちかのあ場ば合あせを
ニ千餘騎せんよけ金鷲きんじゆの城じゆを拵そなへて責戰せきせんひゆひひふ軍ぐん利りくしてあんとんも。虜りよふせり
とゆれた夢ゆめが純友じゅんゆの威勢ゐせをとよし。商隊しょうたい大おほきく。接せつ裏うり備び重じゆうりゆみ
を。あらあれいよとさ。よくあるすづ。りゆび。及およて。河汲かのく續波つづく伊豫いよ主ぬしのに岡安おかやす國防こくぼうのあ圓まんわ。まろ集まつがく小厲こり山さんの
名なだの難なん事ことを向むかうと。川越かわこし紗ざあま船ふね。奏さうこりよべ。攝政せつじやうをひら。三公九卿さんこうく
百日ひゃくじつ面おもてをもく見み。何事なにことぞ。東酒とうしゅの大敵だいごをへ南退なんたい討う小難儀こなんぎの折たる。
西小せいから群盜ぐんとう起おきる。東西一處とうざいの勤きん私わたくしいひまく。古今こきんふ聽ききうち处ところが何なの
せんこゑせんこゑをもく揚ある。汎まんき人ひと膽あひ小竊ことう。一いつ。院いんや主ぬしと成なる。參さんうせ。白皇后はくごう女めの院いん
内侍ないし命めい婦ふ女めの達たつひ至いたるまで。ちや。洛中らくちゆう小朝敵こあさごの襲さ来きふけの心地こゝ。く。
よく下くだへと騒動さいどうを。よこ。鐘かねとの虛說きよせつ街が後ご事ことのあとひのひづく。ちや將ま
門もんの義濃ぎのうの圓墨殿えんしやくでん股またを攻うす。純友じゅんゆの攝そなへ列�の。尼あまが寄よままを奉まつし。

きど風かぜ誅しゆをうぐうう全ぜんて。沿中えんちゆう海かい外ほかの人民じんみん等とう只管ただまん發はきあうける。斯この年としの暮すき。天慶てんけい三年さんの春はると。是ぜと。せよひのき開ひらく。そ。例たと年としの
節せつ會くわいとも悉ごくく延の引ひきく。朝あさ敵ごと討伐とうばの隣となりの主ぬしをせりられけ。鳴呼
今年ことりうる年としど。腰赤こしこ贊さんと。都ととして。さすも同ひと出だした公車こうしゆより成な断絶だんぜつ
常陸じょうりく去よる頃ごろ在ある。系くわいう。大據だき國くに香かの長男おしゃく。上平太貞盛かみひら。畠小
平貞盛ひら。去よる頃ごろ在ある。平ひら。國くに。常陸じょうりくの。大據だき國くに香かの長男おしゃく。上平太貞盛かみひら。畠小
と。空時うつとき。ゆき思おもひ最さい方ほうを。交か繫つき慮り及およ。氣き使つかう。潛か伏ふ。使つかせ。登のせ。食く城じゆの第だい。
父ちちの最さい期ご初はじ。やうふ告こ知しを。俱ともふ夜よく。討う死しそう。と。覺お察さつ究きゅうて。ゆくを。
父ちちの遺おと命めい如ご此ご。と。至いた止と。車くるま。滑なめ。城じゆと。明あ退たい。今いま。軍ぐん變かの國くに。身み成なる
源みな。と。下くだ向むかと。相あ候まわ。卑おく。山下さんげ向むか。と。謀めう戮りくの討うと。廻まわす。と。

書さうけよ。貞盛こそと見るより。備の周辺不差へまうけり。と天小叶ひ
地小叶ひ。狂ひ歎き。斯て有きやもあらねば。急き忠平公。接の
庄館へ伺公。その飯を食へ。演て泣く。服と乞ひけり。忠平公宣けり。
汝が所存云半參う。歎極大きうへ。唯一人沙翁ひより。緯経へと
興へと仄。倘亦不虞のゆゑ。悔て返りぬ。次第。も節度使の下向す。
近き程かすり。身を候て下向す。軍忠を励むべ。努力卑き。懇
小宣ひ。うど。中く思ひ止むぞ。俱ふ天を戴ぎ。父の讐で。一日序時も
延々忍び。曲ては帳を賜ひ。思ひ入へ。そく。の志の深切を感す。
恩たて勅許あり。潔本意を遂。早速拂り登るべ。と。廣華とり。禮お
小鳥とり。侍劔と添て。貞盛小賜り。摂政忠平。仰坐せり。抑あ
置。件の法と修せし。小候願。七日の日小當つ。壇上一歳るり。あ
公卿の奇異の思ひをあま。暫くと慶圓座を立す。件の物を把て。看るふ
一頃の達う。主よ。不測小思ひ。度圓小因せ。度圓則奏へ。曰く。
抑不動明王の惡魔降伏の相と。現せど。肉身の慈悲哀愍の心成
具足せり。燃れ火船と。身み現。と。女房の相と。現せ。大日胎藏の身を現
る。大儀の魔神と。垣前。の相也。うの垣。現めあらず。不動か。身の達
頭。兵。頭。兵。身。身。面。あま。あり。皆五天五國五教。相善相好。之
人の五部を圍む。の墨。あり。また。別中の守護甲冑。小舟。然申。は達の

唐華とり。遣。桓武天皇の御宇。都を平安城へ遷す。國家鎮護の
為ふと。紫震殿。小壇を構え。天皇の御叔父也。慶圓と。やせん。真言の奥
肯を極め。四種の密の據渠。まこと。勅勒て。脇藏鬼の不動明王の像を安
置。件の法と修せし。小候願。七日の日小當つ。壇上一歳るり。あ
公卿の奇異の思ひをあま。暫くと慶圓座を立す。件の物を把て。看るふ
一頃の達う。主よ。不測小思ひ。度圓小因せ。度圓則奏へ。曰く。
抑不動明王の惡魔降伏の相と。現せど。肉身の慈悲哀愍の心成
具足せり。燃れ火船と。身み現。と。女房の相と。現せ。大日胎藏の身を現
る。大儀の魔神と。垣前。の相也。うの垣。現めあらず。不動か。身の達
頭。兵。頭。兵。身。身。面。あま。あり。皆五天五國五教。相善相好。之
人の五部を圍む。の墨。あり。また。別中の守護甲冑。小舟。然申。は達の

七領の中の兵面うり。我朝の守何く是ふ據るを奏へり。かくて遣す
 熟者ふく白く黄うる両蝶と据金物ふ才氣威也あらびて革威に裏を
 返す。今小寶の間く虎の毛あり。儲ハ虎の皮みて威する物と見て尊帝
 の禮うそを定す。是を唐華と号す。亦小鳥とりふ太刀。彼禮が漫より。第
 七日ふ當るの日天皇南殿小御座て。東天て拜ひ。是を丈八尺の靈鳥大
 床ふ倚り。天皇笏て以て招き。其令を大神宮より。御劍の使者小春うそを。羽刷
 飛去けり。其跡小一振の大刀て遺す。在けよ。主上自ら此劍を名ハ八尺大
 靈鳥の中より。御刀の名をばとて。小鳥と号す。唐華と俱小秘藏。ゆひける。
 まごれ禮も太刀。佛神の製作より。本朝守護の兵具。六代まで大内小
 門。後小武臣へ賜うべき。天皇の御記。是が遙回朝敵將門を追討の
 手。

首途ふ賜うとの勅詔。是が貞盛の勇を歎び。別あるとを頂戴う。正月中旬
 小都とまく。東西へ急ぎけり。

按すふ唐華の鳥の事。緯怪異めく鑑とすふ是ぞ唐華鑑の事。ハ
 斫鬼多く。後ふ辨もべ。諸小鳥の太刀の事。本朝武家緯林の載。そ
 源家頸切膝丸小鳥の事。とりう條下小曰く。支太刀の武門の魂。俱梨伽
 羅不動の劍と二つ分割。雌雄の劍と云ふ。折日本名寄の重寧多
 中ふ殊小勝。是へ源家の寶。ガ頸切膝丸小鷦也。この劍の由來を尋ね
 従四位上左馬權頭兼伊豫守源清仲。づぐ四ひをへ天下て守護。ま
 まふ。心ふ叶ふ。不劍て持ばず。奈何うと。鐵を集め。不養の脈をと
 て劍を作らせ。其心不快。先奉の圓。之蓋の御土山とし。不外
 黒朝。うの藏の細。二宿りを數年。居候を。主とて。伏て。伏りを。

將門秀郷

對面の圖



べきや。と玄をより有りて、則て登せん。太刀を作らるゝ事も心ふ
快事也。彼族汝等へよ。吾免紫より遙く先て、甲斐より下りんを細
ユの名すも失元と。八幡宮小諸で行りて、夢想の告て蒙り。又より
六十日を経て、二振の鋏を作りゆき。長さ各二尺七寸あり。満仲あ主を
被りて、殊の勝と云ふ名鋏を名び。秋びかづる太刀をも。一時有罪の
者を切せ。又一人の鋏へ顎を加へて、切られ、顎切と号けり。一の
鋏の膝を加え、切りとぞ。膝丸をも。是より洪ニツの鋏となり。天下を守
護。一度この武功で聲を、後小嫡子摂津守頼光が傳りと。一ふ箇をの
綱灰橋小於て、鬼の腕を截へ。顎切の鋏。是より鬼丸と名を改む。
是より頼光瘡病の事。膝丸とて土蜘蛛を截へ。是より蜘蛛切と
名を改む。又より頼四の孫りゆひ。又食事頼基が傳る。後小奥列前
院を改む。又より頼四の孫りゆひ。又食事頼基が傳る。後小奥列前

九年戰ひの事。勅命が恢復して、頼義が渡まつま。又より義家が傳り。内
守義忠が襲はれ。程々左近將監源義が襲はる。源義の世小。二の
鋏終夜吼り。跡跡切たゞ。吼れる声が、蛇の聲。是より吼丸と改む。
鬼丸が吼れる声。獅子の聲。是より。獅子の子と改めらる。又由源平の
軍あり。又、熊野の別當教真が、義義が駒をも。一万駒を率て、
加賀を高義兄弟を收めて、吼丸と教真が、駒をも。一万駒を率て、
厅内の馬をやう。小鹿をけま。拂磨國より好脈流れてよせ。獅子の子
と改め。又由。又由。又由。又由。又由。又由。又由。又由。又由。又由。又由。
又。義朝討まで。後小鳥の平家の太刀とあり。又由。又由。又由。又由。又由。
又。義朝討まで。後小鳥の平家の太刀とあり。又由。又由。又由。又由。又由。

磨^まの^{うち}飛^とく。裸^{あら}せ^る。顯^{けん}然^{ぜん}す。時^じ代^{だい}も^ち來^きる^る。本^{ほん}妻^めの^う條^{じょう}。試^そみ^る輪^わす。時^じ代^{だい}も^ち來^きる^る。最^{さい}雲^{くも}の^う歎^{たん}。素^す盞^{さざな}鳥^の得^えめ^め處^し。あ^あと^と後^{うしろ}小^こ草^{くさ}薙^{なぎ}て^は。累^{たづな}代^{だい}日^ひ嗣^{つぐ}の^う神^{かみ}寶^{たから}と^も。況^{かく}て^は太^{おほ}神^{じん}宮^{みや}。賜^{たま}り^る。小^こ鳥^の名^な劍^{けん}と^も。臣^{おの}下^げ小^こ賜^{たま}り^る。不^ふ寄^より^る。也^よ。倫^{るん}六^{ろく}代^{だい}を^も。亦^よ御^ご兵^{ひょう}と^も。相^あ手^ての^う兵^{ひょう}と^も。登^{のぼ}り^て十^{じゅう}小^こ星^{せい}の^うり。無^む盡^{じん}の^う舞^{まい}。仰^あうと^りども。小^こ鳥^の太^{おほ}刀^{とう}と^も。平^{ひら}家^け累^{たづな}代^{だい}の^う畫^ゑ書^き。と。童^{わらわ}書^きの^う絃^{げん}。も^もと。御^ご子^この^う異^{こと}同^う。舞^{まい}也^よ。尚^{なお}博^{はく}覽^{らん}の^う人^{ひと}也^よ。

○再び持す。小鳥の太刀と云ふ。平家累代の名劍也。と號ぶる。も
りあつ。晚に伊勢守家公の紀録ありて。とて宝鏡寶鏡と號へり。ま
よ。予ひまごとの紀承と云ふ。故に猶辨論する。正統へどとつても。本朝

第十節 度使東潤へ下向
さざりきあくまくわん

附貞盛覽卷之三

貞盛見齋畫譜

通

ふりひきうるの。とくとくの。とくとくの。とくとくの。
武家総林小戴る處をもととて、のを個一圓名めく異物も
とあく。お事とくへども銀うたと紙ひを、像てそのとと贊言すのを
とあく。とあく。とあく。とあく。とあく。とあく。
第十 節度使東園へ下向

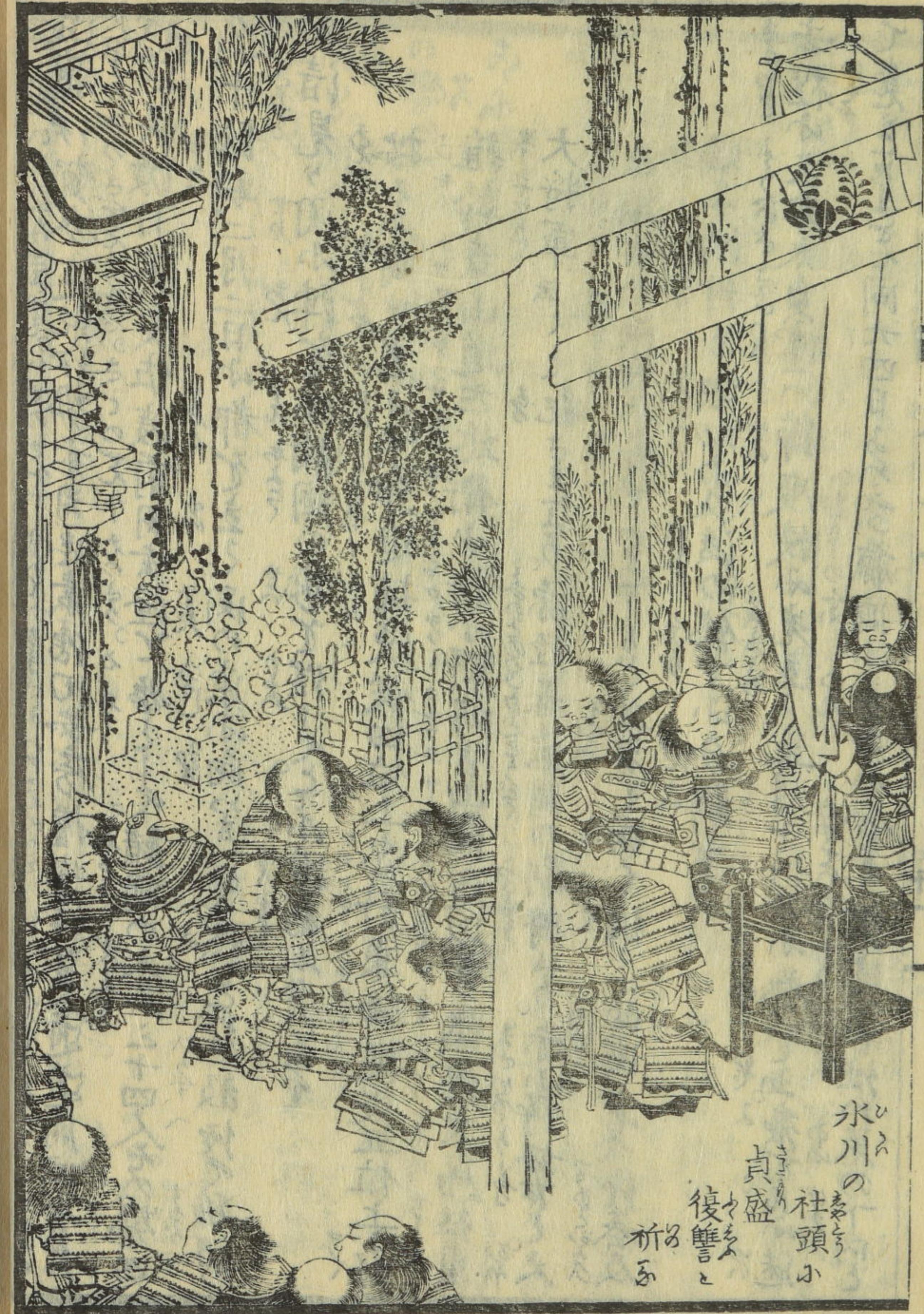
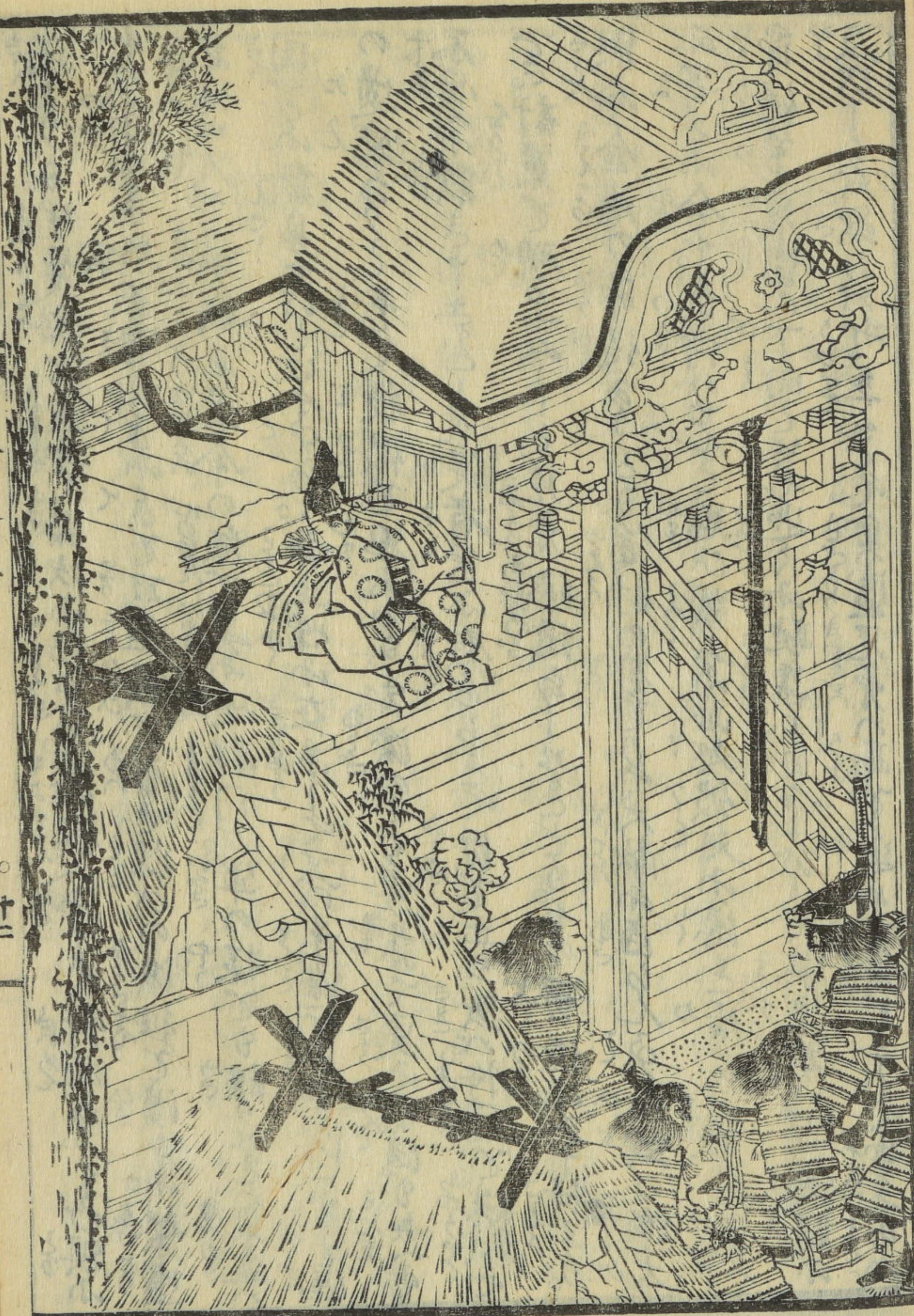
大威德の法を修せり。又泰寧へ勅と受て大元師の法を修す。後百
の明達は義濃の國中山の神宮寺を。四矢三の法を修せり。猶も延暦降伏
の名と。朝庭に於て百座講と修て。仁王會と称す。此時も淨藏貴重。

侍賢門の講跡

按京釋尊意の丹生氏と平安城の人々。應神天皇の後胤か。元
慶二年天台山に登りて明學を。十七歳にて剃髪。座主圓珍
大師を仰ぐ。一紀年の間小布教で究ひ。延長四年五月延壽寺の
座主小往を。天慶三年二月廿四日寂。歿七十五。釋泰寧へ藤氏を
京洛の人々。蓬井阿闍梨より密法を得。天慶二年小將門降伏の
折と。本來天慶三年十二月三日寂。歲七十四。釋明達へ土師氏を
移す。其の子。天慶三年正月。橫門に於て將門降伏の
歲七十九。釋澤藏の寧相宮内郷三善清経の八男なり。十一歳より
寛平法窟の勅ふ。釋山に登り玄昭法師を密教す。大慧法師を
隨ひ。悉曇章を掌ぶ。天慶三年正月。橫門に於て將門降伏
を祈る。本文。康保元年十一月廿一日寂。歲七十四。各執事。元亨釋書
のモモト。載る处斯の如。尊意が傳ふ。於て將門降伏祈のゆゑ。釋
書の脱漏。その是非を知ら。但一。天慶三年二月廿四日。寂。將門
歸ふ。伏ま。同月十四日。かと。遷化以前より事へ明け。

諸も公卿食儀あり。追討使を遣め。征東大將軍の參議右衛門督藤原
忠文副將軍。同食。刑部大輔忠綱。散役惟良。守源。經基。各物の

具奏み出を軍兵を石具にて參内せしとひれ。主上南殿み出ゆあつて近侍
司内閣下小陣と張内陣外陣の公卿八座八首の諸官吏にて中議の節會
て乃宣大將軍副將軍。もの禮儀正しく振舞て節刀をびぶ鈴聲賜る。
弓場敵の蘭の小戸より届り虫蟻の内に敷ぞとえみけ。則處山東海の處
官府て賜り。軍忠わくは忠賞せもうべき。宣下せり。其文書繫り呈
あみ略を前半御要。西園へ左馬門佐藤原倫實て大將として五歳内
の勧率餘騎小糸伊淡路の船軍小駒うちり。千五百餘騎と相添く差
向り。斯て征東大將軍官府とて
大駒波と。旅童びと。わ
稚ひ太く逞者と助かうも參り。長て踏せく歩もせがいと。相送ふ
面くみ。右京亮藤原國幹。大陸物平清基。修理進廣者。散役源範國。清
万六千餘騎。二月二日小都を立て。國の東に向ひ。然ま六日教練て駿河の
國。清見。國小陣を。尼諸國の勢と。お進局志ひひ至
按。多國史畧。小云。命追捕使從四位上忠舒東海道。從五位上小野
維幹。東山道。左近衛少將小野好古。山陽道。以參議忠文爲征東
大將軍。云くと。紀。源經基。東國の副將。亦小野好古と。大
女攝の兩將。小命ゼ。り。と。其名。て。継く。組。一。西國。そ。の。經基及
て。嫡。み。満。仲。も。勲。功。わ。う。後。の。條。下。小。分。解。せ
去程。小。上。卒。太。貞。憲。の。節。度。使。小。先。立。正。月。十。六。日。小。都。を。出。発。て。自。由。の。迷
で。急。き。る。と。同。六。四。日。の。武。氣。圓。小。着。か。る。食。肴。蠶。蜜。茶。餅。の。尾。の。下。向。と



國より。甲斐國と立てて路次小河更に旅館へかよて對面す。まづ與小
の恙ありて辭て音てよかと取組額て食せ。悦びの涙。神と瀕也。轡鹽
あまやまざ。うめ。ろめ。あめ。あめ。づき。の。まく。と。ゆき。やう。さ
兼往ひ父が最期。且遺余の頬て。具ふ述將門。軍の様とも詠り。まづ。圓盤
圓て。ふ歎息せば。とりふゆき。吾生燐か在系。と。父の先途を。えざる。こと。す
の遺憾あり。是て親彼て思ふゆ。と。涙のこも。憂て。更小前渡り。安。ま
不覚。不歡きや。さと。一。從者等小慰り。と。涙を止ら。然ば將門と。隸駕を
去。射策て廻ら。ましと。兄弟。絆縫。か。り。まども。その勢。僅。ふ。十騎。半。
候令。金渢の角後。ま。と。筒封の勢。と。大敵。み。あ。り。ん。と。ひ。だ。こ。り。一。
小寄る。ふ。全。ト。奈何。せん。と。恩。ひ。頬。あ。此處。般。外。源。是。壇。と。圓。背。の。家人
角後等。圓。壇。の。下向。と。告。え。近く。小馳。集。り。日。か。ま。べ。と。其。軍。勢。八。百。餘。騎。小
及び。一。ぐ。然。ら。ば。打。立。と。そ。奥。壇。兄弟。ハ。馬。て。進。り。下。緒。と。ま。て。出。立。而。小

ひ。の。方。と。うち。と。と。物。舊。る。社。ゆ。と。瑞。埴。の。間。よ。と。門。櫓。樂。見
え。星。天。見。着。馬。と。か。り。わ。と。奈。何。う。山。神。の。社。ゆ。と。向。け。ふ。と。ま。と。富。國。乃
一。の。宮。水。川。大。明。神。か。り。う。と。有。り。と。と。鐵。へ。軍。の。首。途。ふ。參。輔。せ。ま。や。と。莫。き。
け。り。然。然。方。繁。盛。と。ま。と。止。り。く。吾。ら。の。喪。み。疾。て。濁。櫛。の。櫛。う。名。ふ。ゆ。伏。名。納
如。り。ゆ。ま。き。ゆ。ゆ。と。言。ま。け。り。了。諸。事。年。等。柳。今。度。の。由。發。向。へ。疾。の。而。患。と。落。ト。
父。の。高。孝。と。存。む。多。う。憚。の。ゆ。く。ま。と。一。圓。小。高。一。登。て。その。親。み。隨。ひ。と。果。皆。の
人。の。馬。う。下。境。て。腕。神。前。小。縮。て。丹。誠。て。凝。し。追。討。の。行。念。と。あ。と。通。の
領。書。て。認。も。各。上。差。の。鎗。矢。と。一。筋。口。剝。て。片。の。領。書。て。寶。殿。一。納。り。り。領。高。ホ
カリ。ける。处。ふ。不。恩。儀。や。社。檣。懶。不。鳴。動。と。向。鳥。一。羽。飛。出。と。旗。の。よ。小。翻。翻。と
豪。良。と。き。て。死。去。け。ま。え。社。富。社。の。山。神。の。護。ら。せ。か。と。驗。か。ん。と。諸。車。輿。と
慢。ぶ。处。ふ。神。職。兵。整。補。正。範。と。り。る。の。進。を。先。て。言。を。や。柳。當。社。日本。義。主。を

祝ひ祀もろ祈り。かの尊の武徳。方へ世人の食糧うす。今改め。言ふ及筆。
さよばる墳墓。う。白鳥庵か。あして。白鳥の凌と号す。今人の祈念の折
く。白鳥の庵か。へ全く神の納受あり。擁護。一。め。驗あり。然室。獻闇へ
向。まこと。良の方へ。庵をゆふ思ふ。下野を。波
闇。小於て。同意食神の人。て。はふ。し。沖鶴。て。属。もて。進登。む。この山若
あらん。と。高かな。人。とも。奇矣。の。思ひ。と。う。ふけり。

第十 貞盛秀郷合體

附 下野國宇都の宮合戦

活有ける所。下野の怪人。因原藤太秀郷の斎。使者を立て。貞盛。尾
争。へ。事。へ。ケ。縛。り。將門。延威。を。震。ひ。東。幽。と。責。難。け。亂。妨。顯。る。言。深
絶。を。某。も。先。済。よ。便。宣。裁。候。ひ。居。り。へ。ど。も。また。其。討。幕。を。詔。せ。る。
表。み。へ。ま。う。坂。伏。の。新。て。旅。下。渠。小。心。て。緩。き。せ。座。う。あ。ふ。遙。圓。追。討。の。高。田。下
向。と。表。る。卑。く。當。闇。ふ。由。肆。て。移。ま。と。ひ。や。復。ふ。朝。獻。迎。代。の。隸。て。高。べき。あ。そ。せ。
懸。ふ。事。一。騒。り。と。け。る。お。時。貞。盛。ハ。雲。時。思。拂。一。今。の。世。の。人。心。失。の。中。又。と
隠。え。秀。郷。懸。ふ。ま。う。に。す。も。お。半。奈。何。わ。ま。や。縣。一。寄。て。我。く。と。討。が。見
り。う。こ。計。被。か。ん。ち。如。ノ。代。と。表。き。と。け。る。小。弟。繆。盛。熟。思。接。せ。ま。と。い。也。不。害。勿。悔
の。事。あ。ま。ご。す。も。ま。二。強。ふ。人。と。疑。べ。却。て。過。と。う。と。ゆ。日。未。秀。郷。う。れ。狀。と。候。ふ
き。一。族。廣。う。と。所。淀。多。一。云。道。小。共。と。人。の。嘲。と。顧。ざ。る。人。ふ。ゆ。代。怨。と
そ。の。額。ふ。往。一。般。圓。一。五。誠。て。惧。ふ。封。篠。て。廻。ら。ま。敵。強。大。う。と。怖。や。小。兵。だ
殊。ふ。永。川。の。示。現。と。り。ひ。旁。り。と。相。應。せ。り。と。表。き。と。恐。れ。貞。盛。も。理。ふ。な。と
同。ト。り。や。そ。下。野。へ。打。誠。け。と。秀。郷。へ。境。あ。を。出。逃。ひ。主。客。の。禮。畢。ま。く。期

敵を隠歟すべし。謀て隠せられり。うの軍源もあく。安え室と高岡へやる。そ
 常陸奥別武藏相模甲斐信濃越後上野。うち外折く。ふかて源し。時の多て
 纏ひ張らう。些處彼处より千騎二千騎或ひ五百騎。三百騎我らと馳来れ。
 正月六八日の看到より五万三千餘騎とぞ記する。將門へ斯ともからず。帝都へ
 攻登えり。既に軍の兵合と宣ら。時日とトて進發せんと。その準備である。
 所み日來り。指鉢とも。情を切る。田原秀郷。敵みあう。軍勢を聚らう。
 同えり。まづ足寄小栗。こゝ然ばよ洛の儀を聞て渠を隠代まゝと。城を
 駆き立て辭讓。正月晦日の早旦。相馬の都を起て下野へと進發。以
 て自ら御厨ニ弟将頼て大将として。その勢二万卒餘騎。一自ら大草原四郎
 将平て大將として。二万餘騎。自勢食せて四万八千餘騎。安て声を抑おさめ。安て
 二月朔日より下野の國。壬生宇都宮をふ打臨む。あくまつ將遙と敵の陣を

見て。貞盛秀郷の兩大將との勢雲懐の如く。先。數萬
 あくべ。巍々堂々として。かくまで。素め相違して進む。零時猶豫一々
 在ける。处ふ貞盛秀郷の旗のあと進む。矢失金の鏑を。射み。鐵
 どその日ハ矢軍小口と。暮す。果敢き。あき。軍はけ。翌う二日のまど東雲。ち
 両陣互不寄食。あく。先途と挑。戰ふ。射遠う矢。雨の如く。銃擊の是
 稲妻の如く。汗血沙て。浸し。追う。逐う。責立。がて。數箇度の戦ひ。小倉俱
 小房を行ね。兩勢暫く陣て。氣を休め。筋もろ。處ふ秀郷の陣中より。武者
 一騎。陣頭小萬出。大音声小萬け。其の肩を。名無。離。大弓
 び。あく。陸奥の住人。津川平六。貞包。年積て五十六歳。三十一年の
 背あり。殺生で。山野と家と。物の命を。うみ教。其罪實。小
 免。免く。何を。うと。思ふ。所。小幸。小幸。いし出来。官軍が。朝家の

あらりもタラシム。まへがんわんや。生前の面目あり。コラグ首取て軍神を祀りゆへとのひを全べ
 將門レテ陣よりも思ふ威の遺着。麻毛うる駒小寺までを多くと墓地に營み。妻房
 国の住人。東條次席兵衛入道。遁玄とやをりと。齡既小六十不假。二人の逸
 息。藤川の合戦小討死。深山小猿。林木葉の散。時を疾身を。度軍陣からち温て。討死せをやと思。ども老武者。うと悔つて。安久を立
 人より。幸貴をふき。遺て。數月の望遠。うひを互に老後の恩。太刀打
 売。春敵原のをかめ。屬させまうさんと。両方馬と毫食せ。うひの鐵を注
 さぬ。何より劣らぬ馬上の達者。もと太刀打の名譽。とくに難り。甚だ其を教。
 鐗を削る。及ぶきと。頬て。禮の上等。せ心靜か解。うと馬と。寄食せ。差遣。ぞ
 うけり。良戰。ひそ東條入道。まづ。候あへと津川で駐め。足下も我の戰ひ勝て。強ふ
 賞せ。需り。うひ。たゞ打勝。とくと。老命既小限り。逆の討死と対応の
 うち後。毛光立。まへあらば。俱み差遣。死をとり。津川へ圍て。荒野を參
 ほ細り。及ぶきと。頬て。禮の上等。せ心靜か解。うと馬と。寄食せ。差遣。ぞ
 死う。けり。もとを看みけり。歎味。未だ通情。さと。其志を歎。うり。がる栗
 将頼の陣中。うり。みづ。威の遺着。立つの。の紅葉。と。みかづ。いは。散。と。
 風こ墓。かうらの年齢。合十六七。封き。弱。ハナ。坐。ゆけ。まば。良。山の陣。まづ
 同一。年齢の。素戔。者。大群。と。墓。か。時。て。仰。く。真。戰。ふ。の。討。キ。あ。双方。う。
 兵士等。繞て。墓。か。西。と。打。と。東。と。龜。城。の。南北。か。馳。廻。り。難。と。切。え。桃。之。獻。ふ
 かくて。その日。も。暮。け。と。勝。負。の。明。日。と。約。し。や。あ。陣。互。の。門。退。き。遠。築。然。焚。く
 明。ち。然。待。ら。不。其。欲。立。満。を。や。ふ。岡。殿。を。次。考。降。雨。盆。て。覆。む。如。し。天。明。て。も
 犬。あ。年。家。
 獨。兩。廻。止。せ。か。て。の。合。戰。う。ぎ。と。軍。使。互。小。奉。絆。と。其。日。の。燒。破。小。奉。う。ぎ。
 犬。ふ。至。つ。も。廻。止。せ。雨。ま。小。止。う。ぎ。と。兵。士。等。惟。幕。と。衝。て。廣。眼。ま。く

在けらず焚捨くらし篭大の奈何れや壽レ吹き元大革原將平。役所の軒小轍え
 つ見よと離ゆく者多く火へ稍小轍すて陣も白盛の如くふる。あく
 於て駿き周章。驚馬被夜討の入りうきて大勢一度小混雜すとば。うの實をさく
 関札さば威ハ繫り馬の跨り。あくまども動うねれ頻小轍をかうむ。又ハ法され
 うとば持と矢と失ひく探もむ。太刀よ刀と走まん。同士討ふ及ばむ。貞監事
 郷こま死えす。いや敵陣み回忠の者出来うそ。時の声を合せよとて。太鼓を鳴
 指て敵き吐と叫で責がよ。太刀よ刀と走まん。同士討ふ及ばむ。貞監事
 北てゆ。活有りとども路の晴れ。殊小大雨の後あと六日ともいそば溝ともの長平
 一面小漲る水の威ひへり或ひへ倒れ。跡より岐方の落葉るまへ敵の進を心ひて
 気も魂も身も滅ぼ。遠く小築けら。圓盤の勝小あて北をと退て三千餘町の
 虚小衆じて相馬の津まで追討んと議せられ。秀郷の主歎止て曰今度敵
 不慮小敗北せら。相馬の勝りを。諸方へ別と薦め。殊ふお汽の者を
 一人も討う事無。故まぐらく相馬を、繫て以て敗軍の士卒と集後後充ゆ
 繋ひ。ある時へ大敵と前後小清く難敵す。先被撃て退散して敵せ一城ふ
 聚めか。四方より追取參。貴さんこそ味方ふ於て必勝の利きくをと嘗て指
 さす。とぞまよりども。おどりまく。おどりまく。おどりまく。おどりまく。
 れき。網小負。鹽園意して。おづ敗軍の賊将等を。追撃よどきを筆せり。ひ

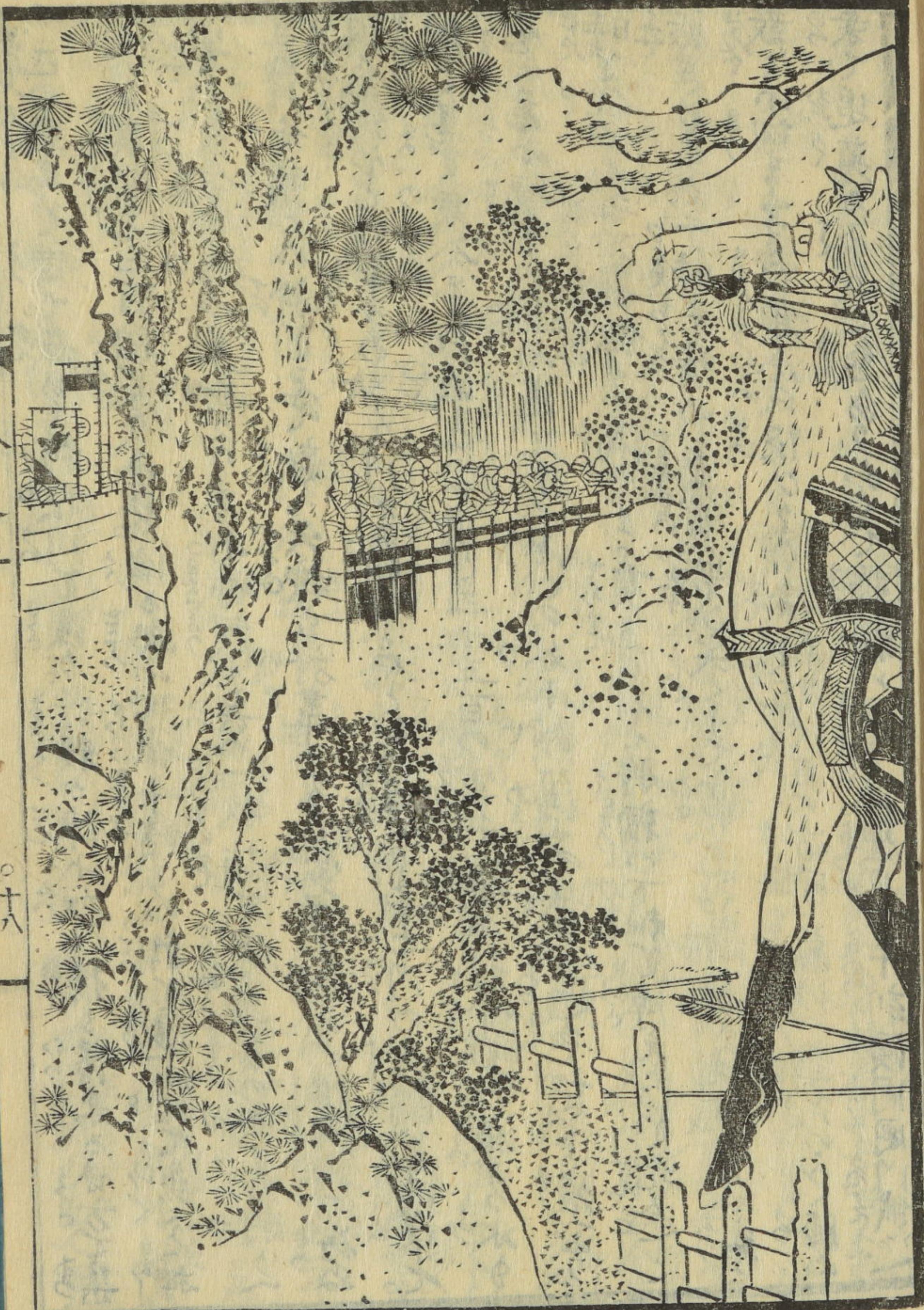
第十二

御厨三郎討死

附

下總古河合戦

さて秀郷の息男田原太郎千時。同次郎千晴。三千五百餘騎を率え。
 武藏の岡へ向ひ。平次。織田。常陸の岡へ向ひ。あく
 常陸久喜茂。只一人上野を経て武藏の岡へ立。糸利根川の岸へ車を向ふ
 物の程二三百騎控へ。旗の紋と全く。御厨三郎を心不快びて声を揚。



津川貞包
陣頭小蒐出で
末歎をかう
討死あへ

近の衆馬を借て、駿々利根川を渡り。將頼が陣ふかり。獨り廢帝の所方を集
め。其勢千二百騎。半りふき。活る處の内原千晴。の射を逼ふて、走と押
寄に矢を食と作つて射うけよ。將頼が兵一枚指て、突進ぐるの矢をも射し
まね。千晴との射とこそ敵へ矢擣も射盡する。と覺ゆ。そのまゝ臆病の聲
奴原何やどの率うちん川を渡せりや。とて程とそむと川の濱瀬とて渡した。
観と馬を衆へまじ。後まじせと三千五百の軍兵一度み打入り。漏ぎて冰す
きが高ふ。壠とく上ふ湛えり。思ひの外か瀕へ浅え。は一人の邊をもくと壠下り。
時と作つて押取る餘さず漏さず。責立ち。それを將頼の下部て傳え。らを先途と
防ぎけり。千時千晴のあ勢ぐ。勢ひ尖く。てあり。崩き。崩き。得てや。散く。か
散く。か切まう。将頼今。快ひ。捨鞭打く。西の方へと轟ひ。西方へと勝ふ
の。かく。と。ま。乗て追。蒐る。ゆり。と急か。がくて將頼の達く。ふ翌日。午刻頃。同圍門城

打ふぞ心へゆきふ勇むことどす。景勢ふ元勢の敵へぐく。將頼ふさノ兵、威、討と
或へ北かみ今いまもや。七八騎きふききりかけ。將頼まさあらひ今いまとともまでぞ。田の畔はの蘿つるをす
寄よく。自害せんととうじうじ。雨あめの如おく射のく。矢や。傍腰わきて射の通とと。射腹の足あし
上うへまづ。二袁ふたえんのりとと死死でげ。千晴ちづの郎らを駆く寄よて首くびを取と勝かつ時ときて揚ある
下しも野のと引ひ込こも。と小坂こざか上う近ちか高藤原たかとうら。常陸じょうりくの方ほうへ薄うすり。大塙おお原はら四
弟おと將平まさひら。音おと傳つたてとけ。弟おと一いち此軍このぐんの敗軍ひぐんを常陸じょうりく國くに誠まこと勢ぜいを屬す。
相馬さがみの後うしろ議ぎを爲あべ。豫よて期ときをうむととどす。其次つぎ將平まさひらの貞じん陸りくが勢ぜい
團だんく。郎らをを射のて痛いた癒ゆして負馬ふまを放はなすとと小輪田こりわだ十郎じゅうらう踏ふ止とどく邊へん分ぶん
獻ささと逃と散さんて。衆馬しゆまを勞なぐり衆しゆせ。相馬さがみの方ほうへ落おち。一いち謀食ぼうじき期ときせんせん。近ちか高雲たかくも
城じゆへ不塞ふそく小恩こおん。歌津かづ守まも。長原ながはらせんせん。妙三みょうさんと高齋こうさい。常陸じょうりく美間みまの
庄いわへ。軍勢ぐんせいを集あつらける。平討ひらう。ふ滅めつり是これば。世よ計けれ津つと撻うく。堵ふ

方ほうの動うご幹かんて網あみひ廢はい。方ほうの織おり密ひそ篤だつ。廢はい向むかもと安多あんだ年とし恩顧おんくわの兵ひょうを集あつつて。
一万餘騎よとと。下しも諸しよ小こ陣じんを取とて。麻あ。土浦つちうら。松まつの二ふたヶヶ前まへ小こ関せきを度とく。
下しも總そうの通と路じゆを断きり。有あ量りょうを三さん間まんの陣じんの車くるを兵糧ひょうりょう。下しも總そうの通と路じゆを度とく。
降おり。軍兵ぐんひょうへ飢うか望む。接つく。敵の車くるを兵糧ひょうりょう。下しも總そうの通と路じゆを度とく。
度とく。軍兵ぐんひょうへ飢うか望む。接つく。敵の車くるを兵糧ひょうりょう。下しも總そうの通と路じゆを度とく。
度とく。軍兵ぐんひょうへ飢うか望む。接つく。敵の車くるを兵糧ひょうりょう。下しも總

卷之三

向ふ云々の事は後と。終て刺大將の前へ至りて、近高の
二人まで直み前を刎りとけ。天讐の程とも怖い。爰の大草原四郎將平、二
月五日明方の痛身負て相馬小塙。軍の次第に歸りけども、將門とて威熱
湧く按小相遠一力て廢し。唯果とる討りあり。かくて再び恩惠す。小旗を
獻て渢んる。其略のござる所也。然へ良ら進發せんと。二万餘騎の軍勢へ
再び敵艦の勢ら。荒木小川と支えさせ其勢へ二万餘騎を以て。河内打
出陣と振れ株と引合や寄るを後ひと。諸も貞寧と秀郷のあ將四万隊
時と引率し。同十日の朝まで兵を送敵陣をえさせ。東幽四五里間小打
合で色々の旗を餘流。春風み顛て。雲あり。聲き氣の波震ふ事より其際の程
五六方騎野ゆの山ゆも充满て。軍の壁の壁く六連み懸月の如く。邊の壁と重つて。
秋の千種の色み伏す。かくてあ渢進と近づき。時と食せ賣戰ふ矢叫びの声へ

篲と蟻せ岡と陣て拂て鳴鹿山ゆき移り。切折とみ達坂をとし。檢査
拂て拂とみ。大石大木を積累ね。また堺あおり。後に轍を千餘騎あり。又
三千餘騎と相應て。餘所の山ふ伏見や敵の寄を候みけり。

平將門退治圖會三終

